
精神科医： マリー＝フランス・イルゴイエンヌさん講演録

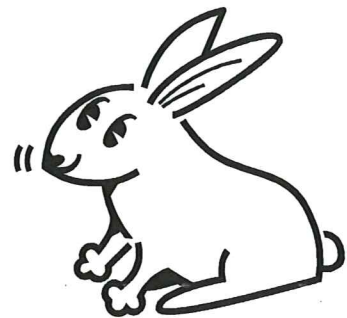
Marie-France Hirigoyen

第6回 モントリオール国際職場のいじめ学会

「なぜ、職場でモラル・ハラスメント

に悩まされるのか？」

編集・発行：職場のモラル・ハラスメントをなくす会
連絡先：〒532-0013 大阪市淀川区木川西2丁目19-17
Tel&Fax: (06)4981-3076 e-mail: info@morahara.org
URL : <http://www.morahara.org>





なぜ、職場でモラル・ハラスメントに悩まされるのか？

精神科医

マリー＝フランス・イルゴイエンヌ Marie-France Hirigoyen

(2008年6月6日、カナダ ケベック大学・モントリオール校にて)

たくさんのご来場の皆様を前にして少し緊張していますが、私の言いたいことが皆様にうまく伝わることを願っています。まずアンジェロに、そして素晴らしいスタッフの方々に、また私を応援して下さいましたすべての人々に感謝したいと思います。

講演をはじめるとあたり、私の立場の特徴についてお話したいと思います。このことはおそらく物事を少し違った角度からみることに役立つでしょう。私が他の人たちと少し違う点は、私は大学でも教えていますが、大学の枠組みの中にいるわけではなく、なによりも現場の精神科医であるということです。私はこの仕事を始めてかなり長くなります。私は自分の実践に依拠しながら、モラル・ハラスメント(以下、モラハラ)という名称を名づけ、とりわけそれにとまなう苦しみを明確にしました。

次に、プログラムのタイトルを少し変えたことにふれておきます。「なぜ職場で多くのモラハラの苦しみが？」から「なぜ職場で常により多くのモラハラの苦しみが？」に変更しました。これはパラドックスになっていますが、どういうことかと言いますと、フランス政府は「産業界はこの種の問題に、非常に敏感になってきていて、おそらくフランスには、調査する余地はまだ残ってはいるもの

の、本当のモラハラはそれほど多くない」といった具合にけん制しています。しかし、目に見えないところで、非常に多くの苦しみが確かに存在するのです。

◆ 「なぜ」を問うこと ◆

私の論点は、孤独についての新しい本の結論と少し重複しますが、「なぜ」を問うことです。私はモラハラについて多く研究してきましたが、それについて聞きたいと思います。つい先ほど私は、カルロ・カポネの講演に出席してきました。そこで「私の意図していることを取り違えて、私の最初の本を時々歪曲して捉えているのではないか」と感じたということをお話したいと思います。

私が最初の本で言いたかったのは「加害者は意地が悪くて、病的である」とかいったようなことではないのです。私がしたかったのは、「なぜ人はこういった状況に陥り、そこから抜け出すことができなくなるか」、問い詰めると「なぜハラスメントが可能になるか」ということについての分析です。

現在、フランスには明確な法律があるにもかかわらず、多くの場合、被害者が職場から立ち去らざるを得ないといったことが非常によく確認されています。法律というのは、必ずしも被害にあうこと